



Title	ヴィゴツキーのゲシュタルト発達論批判
Author(s)	長橋, 聡; Nagahashi, Satoshi; 新井, 翔 他
Citation	北海道大学大学院教育学研究院紀要, 113, 81-108
Issue Date	2011-08-22
DOI	https://doi.org/10.14943/b.edu.113.81
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/46993
Type	departmental bulletin paper
File Information	113Nagahashi.pdf



ヴィゴツキーのゲシュタルト発達論批判

長橋 聡*・新井 翔**・佐藤 公治***

Vygotsky's Critical Review to the Gestaltian Developmental Theory

Satoshi NAGAHASHI Shou ARAI and Kimiharu SATO

【要旨】本論では、ヴィゴツキーがゲシュタルト心理学の立場から展開された発達理論に関してその理論的可能性についてどのような立場を取っていたのかを考察する。ヴィゴツキーはゲシュタルト心理学に対しては、行動主義が取った要素還元主義を超えるものとして肯定的な評価を下している。このことは、彼の多くの著書で明らかになっている。ヴィゴツキーがゲシュタルト派の発達理論に対してどのような批判的検討を行っていたのかを明らかにすることは、ヴィゴツキーの発達に対する理論的姿勢を明確にしていくことでもある。ここではゲシュタルト派発達論として知られるクルト・コフカの理論についてヴィゴツキーが行った批判論文とその内容を検討する。併せて同じゲシュタルト派発達心理学者のクルト・レヴィンの理論に対してヴィゴツキーがどのような考え方を取っていたのかを考察する。

【キーワード】ヴィゴツキー、ゲシュタルト発達論、クルト・コフカ、クルト・レヴィン

1. はじめに

(1) ヴィゴツキー「ゲシュタルト心理学における発達の問題」とコフカ『精神発達の原理』

本論では、ヴィゴツキーがゲシュタルト派発達研究者であるクルト・コフカが著した『精神発達の原理』のロシア語版に対する批判論文としてまとめた「ゲシュタルト心理学における発達の問題」を検討することを通して、以下の諸点を明らかにする。第1に、ヴィゴツキーはゲシュタルト心理学に対してどのような評価と批判を行っていたのかを明らかにする。第2に、ヴィゴツキーの視点を通して、ゲシュタルト心理学の新たな可能性、特にコフカとレヴィンに代表されるゲシュタルト派発達論の再構築の可能性とその課題をさぐる。そして第3に、ヴィゴツキーが言う人間精神をトータルに把握するために、ことばと人間精神の根源としてのゲシュタルトの役割、そして、その両者の関係について議論する。

第1と第2に関しては、ヴィゴツキーは複数の著書の中でゲシュタルト心理学をそれまでの要素主義的発想と機械論的な観点からの心理学を克服するものとして位置づけてきたという経緯がある。もちろん、このゲシュタルト心理学についてはゲシュタルトという説明原理

*北海道大学大学院教育学院博士後期課程

**北海道大学大学院教育学院修士課程

***北海道大学大学院教育学研究院人間発達科学分野 教授

を共有しながらも、異なった視点と対象についての研究が行われており、決して一つにまとめる形で議論することはできないものである。その中でヴィゴツキーがクルト・コフカの著した上記著書のロシア語版に注目し、書評や著書紹介という枠を超えて長大なる論文としてまとめた理由は、同じ人間精神の発達に関わっている者として発達研究にとってゲシュタルト原理はどこまで説明原理として有効なのか、あるいはそれらは本来的にはどのように位置づけるべきなのかを明らかにしたいということであった。このようなヴィゴツキーの議論を通して、ゲシュタルト心理学の成果を発達研究としてどこまで使うことができるのか、そのためには新たな課題として何があるのかということも見えてくる。そして、やや大きな課題である第3の問題は、現象学者のメルロ＝ポンティが生涯にわたって問い続けた「無言のコギト」としてのゲシュタルトは存在可能かということに関わるものである。それは同時に、言語の獲得を優位に置いたヴィゴツキーの発達論を見直す必要はないのか、あるいは彼が言っている言語の本来的な機能とその意味はどのようなものであったかを考えることでもある。このようにヴィゴツキーが一冊の著書について例外ともいえる長大な論文によって批判的に論じた内容を検討していくことによって、逆にヴィゴツキー研究の今日的課題、そしてゲシュタルト心理学の発達研究の新たな展開の可能性とその課題を探ることが可能になる。

本論で主に取り上げる「ゲシュタルト心理学における発達の問題」は、上述の通り『精神発達の原理』（1921年）への批判的序文であり、その内容は1934年に出版されたロシア語版に準拠している。コフカのこの著書は第1版が出版された4年後の1925年にドイツ語の改訂版が出されていて、この改訂版は英語に訳されて“The Growth of the Mind”という題で1928年に出版されている。また、日本語版としては懸巻太郎訳で1935年に出版された『児童精神発達の原理』がある。日本語版は内容から判断すると1921年のドイツ語原書を用いており、一部英語版によって内容の確認を行っている。一方、英語版の方は、完全に改訂版に準拠しているため、英語版には書かれているが日本語版には書かれていない部分があったり、いくつか記述の細部が異なっている。また本論の中心となるヴィゴツキーの書評の中には、英語版にも日本語版にも該当箇所が見当たらない記述があるが、これはロシア語版がドイツ語版第三版として加筆修正されたものをもとにしているためである。このドイツ語版第三版は結局、出版されることがなく、また英語版もない。そのために改訂第三版はロシア語版しか存在しない¹。本論文では、ヴィゴツキーが批判的序文の中で取り上げているコフカの文章に関しては、可能な限り英語版と日本語版に戻って確認をし、基本

¹ ドイツ語版として刊行されなかったコフカの『精神発達の原理』の改訂第三版がロシア語版として出版された理由の詳細は不明であるが、一つの事実としてこの改訂第三版が準備される少し前にコフカ自身もルリヤ、そしてヴィゴツキーが行った調査に共同研究者として加わっていたということがある。この調査は中央アジアのウズベキスタンの人たちの認識能力に関する研究のために1931年と32年に行われたものである。これはルリヤによってまとめられ、『認識の史的発達』（1976）として邦訳も出されている有名な研究であるが、この研究の中では幾何学図形を現地の人たちはどのように把握しているかという調査も行われており、彼らには特有な幾何学的図形の理解の仕方があることが報告されている。この結果は、コフカの考えとは異なってゲシュタルト原理は普遍的なものというよりは、文化的変数の影響を受けるものであることを示すものである。いずれにしても、コフカとヴィゴツキーとは直接的な交流があり、その中で刊行されることなく終わった改訂第三版をコフカから入手したことでロシア語版が刊行されたと思われる。

的にはより新しい版である英語版を参照した（本文中ではコフカ英語版と表記）。また、上記のような事情から、ロシア語版にのみあると思われる記述がいくつか存在しており、その部分はヴィゴツキーの記述をそのまま使用することにした。ヴィゴツキーの批判的序文については、英訳、日本語訳の両方を使用するが、ヴィゴツキーの文章の引用にあたっては日本語訳を参照しながらも基本的には英語版（The collected works of L.S. Vygotsky Vol.3 所収の論文）を用いる（本文中ではヴィゴツキー英語版と表記）。従って引用文のページは英語版のものである。

（２）『精神発達の原理』の概要

本論で取り上げる「ゲシュタルト心理学における発達の問題」は、そもそもクルト・コフカの著書『精神発達の原理』のロシア語版への批判的序文として書かれたものである。従って、ゲシュタルト心理学に対するヴィゴツキーの批判や評価を見る前に、まずは批判の対象となっているコフカの著書の内容を簡潔に述べておかなければならない。ここであえて『精神発達の原理』の内容を直接取り上げようというのは、出版されてから相当の年数が経っており、この著書に目を通すこともその内容を確認することも容易ではなくなっているからである。そこで、ここでは最低限、必要な内容を本文に即して述べていく。コフカの著書の内容確認をしないままヴィゴツキーの批判的序文だけを読んで理解してしまうことは避けるべきであろうし、そもそもヴィゴツキーが批判していることの内容的な妥当性を検討する上でもコフカの原著に戻って検討することが必要だからである。

コフカのこの著書は全部で6つの章から成っている。第1章と第2章では、コフカはまず、観察の方法やデータの扱い方について自らの立場を表明している。例えば彼は、心理学的な理論による子ども一般に関する客観的な知識（「過程観察（observation of event）」）と、母親の視点に代表されるような「生きた理解（vital understanding）」を通した子ども理解（「行為観察（observation of conduct）」）という二つの視点が存在することを指摘している。この二つの視点によって提示される概念は、前者は「機能概念（functional concepts）」、後者は「叙述概念（descriptive concepts）」と呼ばれている。機能概念は主に自然科学に見られるような、いわゆる客観的な記録によって対象を理解する考え方であり、叙述概念は行動主体の意志や目的といった、内面に関する解釈も許すような理解である。コフカが活躍していた時代では、叙述概念は機能概念に比べて心理学の方法として劣っていると見られがちだったが、コフカは機能概念による人間心理の理解を絶対化せず、機能概念と叙述概念は相補的で優劣の差の無いものとみている。

この他にも、意識と神経系（身体）、素質と環境といった対立的な概念が挙げられているが、これらについても長所と短所、正しい部分と間違った部分を指摘した上で、ケースや目的による使い分けが必要であると説くなど、これらの対立概念を同等なもの、あるいは相補的なものとして扱っている。その上で、観察や実験で得られた事実を的確な視点で吟味し、子どもの発達の全体を観ようというのがこの著書におけるコフカの姿勢である。

上記のような姿勢にのっかって、第3章でコフカは精神発達の出発として乳幼児の前知能的な行動の発達を描写し、その後の第4章、第5章で精神の発達について述べている。そしてその総括として、第6章で子どもの精神世界と大人の精神世界との違いが何に由来するのかを述べ、前者から後者への変化の動態を述べている。

以上のことを説明するためのデータとして、コフカは、彼自身や他の人物が行った実験や観察（特にケーラーのものが多い）を用いて乳幼児の詳細な記述や知能についての考察を行っている。それらの詳細な内容については、ヴィゴツキーの批判と合わせて後述するので、ここでは理論としての眼目を述べるにとどめる。その眼目となっているのは次の2点である。

第1は、行動やその発達（学習）がある種の目的性、志向性を持っているという点である。これに関してはソーンダイクの試行錯誤の学習論に真っ向から反対することでコフカの考えが述べられている。ソーンダイクの論は、ランダムな行為が偶然の成功を繰り返すことによって次第に強化されていくことを学習の本質とした論であった。それに対してコフカは、学習は動物が持つ目的を志向して起こるものであり、それに沿った全体的な場や構造の学習が突発的に起こるという説を展開する。このような、目的と合致した状況の構造化、即ちゲシュタルト化というものが、動物の行動の基礎にあるとコフカは考える。そしてそれは下等動物から人間に至るまで一貫して観察される。この、種を超えた一般性を持つ（ように見える）行動のゲシュタルト的性質が彼の発達原理の第1の中心点である。

第2は、人間と他の動物の行動を貫く一般法則によって、人間の全成長過程における知性の本質を論じたという点である。これは第1の点で述べたゲシュタルトの原理の正当性を系統発生から個体発生に当てはめたものと考えて良い。つまり、ゲシュタルトの原理が特定の動物種だけに固有の特徴ではなく、あらゆる動物種の行動に当てはまる行動の本質であることを根拠として、人間の本能行動から最高度の知的活動までを貫く基本原理もまたゲシュタルトであるとコフカは主張したのである。彼はこの観点に基づいてビューラーの三段階説を批判する。ビューラーは人間の活動の知的水準を本能、訓練、叡智の三段階に分け、叡智は人間特有のものであるとした。コフカはその論について、叡智と他の二者との繋がりが説明されておらず、多元的で一貫性の乏しいものと批判している。コフカは「叡智は内的要求と外的環境との関係を適合させるためのものだ」（コフカ英語版, p.251）としており、これはあらゆる動物種の行動に見られるものである。そして「内的要求と外的環境との関係を適合させる」ことを志向するものとは、ゲシュタルト的知覚・行動に他ならない。そして、このゲシュタルト的性質を中心に据えると、ビューラーのように本能、訓練、叡智は分断されず、統一的な過程として一貫性を持つ。このようなことからコフカは、人間の発達の本質としてゲシュタルトを挙げるのである。

以上の2点を踏まえてコフカの発達論を要約すると、人間を含めた動物の行動原理の根本には、内的要求と外的環境を接続するようなゲシュタルト的性質があり、そのゲシュタルト的性質の発達こそが精神発達そのものだという点である。実際に彼は第6章において、子どもの知的発達は、不十分で未分化な遊戯的世界である子どもの世界（＝ゲシュタルト）から、完全に包括的で現実的な大人の世界（＝ゲシュタルト）に移行することであると結論づけている。つまり、コフカは、ゲシュタルト的な行動や現象が下等動物（クモやミツバチなど）から人間にまで見られるという事実をもって、ゲシュタルトを全ての動物種の行動の基本であり本質であるとみなした。そして、その本質を子どもから大人への発達に相似同形的に当てはめ、人間の発達を貫く原理としてゲシュタルト的性質を位置づけたのである。このようなものがコフカの発達論が構築された際の思考の道筋であったと考えることができる。

(3) ヴィゴツキーのコフカ・ゲシュタルト発達論批判の骨子

ヴィゴツキーのコフカ『精神発達の原理』への批判の中心部分は、ケーラーによって行われたチンパンジーの研究で明らかになった「動物には知的行為が存在する」ということをコフカが拡大解釈し、「人間の知性と動物の知的行為に境界は無い」という主張を展開している点である。コフカは、動物の学習研究で強調されてきた試行錯誤の考え方、つまり動物には思考活動が存在しないという考えに対するアンチ・テーゼとして、思考や認知活動を前提にしたゲシュタルト原理に基づく説明を動物と人間に共通に当てはめようとしたのである。ここには過剰な一般化があるとヴィゴツキーは言う。つまり、ヴィゴツキーによるコフカへの批判の焦点は、「かれ（コフカ）が子どもの精神発達の基本的現象を動物の心理学を支配している原理に帰着させようとしていることにある」（ヴィゴツキー英語版, p.211）ということに尽きる。ヴィゴツキーは繰り返し、ゲシュタルト原理は動物の行為の合目的性を示していること、それはソーンダイクの試行錯誤理論よりも動物の行動を正しく説明していることを指摘し、ゲシュタルト理論を高く評価している。そして、その理論の正しさゆえに、人間の心理を明らかにするためには不十分であるとも言うのである。「まさに、ゲシュタルトはなんらかの原始的で原初的なものであるがゆえに、それは人間に固有の活動形態を説明するための決定的モメントにならないのである」（同上, p.222）という記述が、コフカのゲシュタルト原理に対してヴィゴツキーが下した結論のひとつである。以下では、ヴィゴツキーがコフカに対して行った批判の内容を詳しく見ていくが、はじめに批判の要点をまとめておく。

ヴィゴツキーはまず、コフカのゲシュタルト原理が、機械論と精神生氣論という、ともに行き詰った二つの科学思想を克服するために出されたものであることを明言し、それが未だ成功していないと言う。その上で、コフカの原理を基点に正しく発展させていくために、ゲシュタルトの原理と発達の原理という二つの基本的原理を軸に、三つの観点から検討を行うとしている。その三つの観点とは、1)『精神発達の原理』を貫く基本原理の検討、2) その基本原理と用いられている事実資料との対応の検討、3) それらを児童発達の現実に適用することについての検討、というものである。これらの観点は必ずしもこの順序で記されていないが、ヴィゴツキーはこれらの観点にもとづいてコフカの理論を批判し、自説を展開している。ヴィゴツキーの具体的なコフカ批判の内容は大きくは次の二つの個所に対して行われている。一つは、コフカが下等な動物の学習の原理としてしばしば出されることが多いソーンダイクの試行錯誤説を批判している部分である。二つは、ケーラーのチンパンジーの問題解決行動を取り上げながらコフカが自己の説を展開している部分である。次章ではまずこの二点を中心に、コフカの理論に対するヴィゴツキーの批判内容を整理しながら述べていく。

2. 知性の原初性をめぐるヴィゴツキーのコフカ批判

(1) コフカのソーンダイク「試行錯誤説」批判と目的的行動

ヴィゴツキーがコフカの問題点としてはじめに上げているのは、コフカが動物の学習でみられる新しい行動の形成に関して述べている部分である。まず、コフカがソーンダイクの説明原理である試行錯誤の考え方をどのように批判しているかを『精神発達の原理』の第4章・精神の発達（その1）第3節の部分で確認してみよう。

コフカによれば、ソーンダイクらの試行錯誤の法則では、動物の学習について次のような

説明をしている。動物は最初から洞察とか意図をもって一定の動作を行って、檻から出たのではないし、しばらくたった後に檻から直ぐ出られるようになった場合でもそこには洞察とか意図などは働いていない。従って行動が漸次変化して、有効な動作が完成していることを動物自身は何も関知することはないし、何故、自分の行動が変化したのかということについて何ら予知することはない（コフカ英語版, p.172）。

それでは、ソーンダイクは有効な動作が増えて、無効な動作が減少していくことをどのように説明しているかという点、状況と有効な動作の間に連合が出来上がるからであり、そしてこの有効動作の表象が餌による生理的快を伴っているからだと言う。そして、どうして快だけが連合を作り、不快は連合を作り出さないのかという問いについては明確な説明を行っていないとコフカは言う。さらにコフカはもっと説明に苦しむようなことが起きていると言う。それは、檻から出るための有効な動作と食物を食べる快との間が直接連合している訳ではなく、檻を出て餌の所まで歩いていく動作が中間にあるということである。そうになると、快はこの有効動作に付着しているのではなく、むしろその後に来る食物を掴み、それを食べる動作に付着していることになる。

ソーンダイクの試行錯誤の原理では、問題の解決につながるような新しい行為—ソーンダイクの問題箱では、箱から抜け出て餌を手に入れるという行為—の出現は偶然によって起きていると説明する。だから新しい行為を起こさせるようなものが事前に動物にあるとは考えない。しかし、コフカはたとえ下等な動物であっても決してでたらめな行動を取っているわけではないと主張する。それはコフカによれば、動物の場合にもゲシュタルトの原理による状況理解を行い、それに基づく行為展開を行っているからである。このゲシュタルト原理は動物が辿り着くべき目標とそのために必要な行動とを結びつけることを可能にしている。そしてコフカは、マクドゥーガルやトールマンが全ての動物の学習は目的意識を持った問題解決行動であると主張していたことを付け加えている（日本語版にはこの記述はないが、英語版では189ページにトールマンの言葉を引用する形で述べられている）。

(2) ヴィゴツキーのコフカ批判：知的行為の原初性をめぐる議論

ヴィゴツキーがコフカの考え方を批判する第一のポイントはコフカがすべての動物の学習にみられる新しい行為発生の原初にあるものをゲシュタルト形成で説明してしまっていることである。つまり、ゲシュタルトの原理をチンパンジーの知的行為だけではなく、ソーンダイクが実験で用いた猫などの下等動物の学習行為にも適用している。これがコフカの主張の重要なポイントの一つであり、ヴィゴツキーのコフカ批判の主要な部分でもある。試行錯誤の原理に対するコフカの反論は次のようなものであった。「学習は決して特殊・個別具体的なものに付随しているものではない。生活体が一つの問題を解くのをうまく習得すると、同じ問題を解けるだけでなく、それまで出会ったことがない新しい別の問題を解くことができるようになる。このような学習はまさに発達であり、決して行動を機械的に積み重ねていくことが学習なのではない。」（コフカ英語版, p.227）。そして、コフカは、次のように言う。「この理論（ゲシュタルト原理）だけがあらゆる状況の中でみられる無数の量的関係について観察されたものの中で何が最も重要なもので、また行動を決定しているものが何であるかを説明することができる（引用者注：無数の量的な関係とは、学習過程における正反応数や反応時間といった数量的な変化のことを指している）。私たちは次のように言おう—意味な場の構造（ゲシュタ

ルト)がその行為の目標と関係する中で作られてくる。問題解決とはこのような構造の形成以外の何ものでもない。私たちににとっては、特別に解かなければならない問題は何もない。というのは、これ以外の他の諸関係は意味のある構造(ゲシュタルト)を作り出すことはないからである。もしも意味を排除してしまって、連合のメカニズムが暗黙として働いていると考えてしまうと、何故有意義な関係が見いだされ、逆に無意味なものを見つけ出すことなどできないのかを説明しなければならなくなる。」(ヴィゴツキーの引用文より。ヴィゴツキー英語版, p.200)。

このようにしてコフカは学習において新しい行為を生み出しているのは学習場面と状況を構造的に捉えることによると説明する。そしてヴィゴツキーがコフカを批判するのは、このようなゲシュタルトの原理を高等動物のチンパンジーや人間の知的行為だけでなく、ソーンダイクの実験で用いた猫などの下等動物の学習の説明にも使っていることである。ヴィゴツキーはコフカに対して次のように批判する。「コフカは構造(引用者注:ゲシュタルト原理のこと)が行動を組織化していく一次的、原初的、基本的な原理であると考えてしまった。コフカは、このゲシュタルトの原理が高度な、あるいは知的な活動形態だけに見られる特徴として限定してしまうことは間違いであり、最も基礎的で、初期の発達の形態においてもみられると述べている。」(同上, p.200)。

ヴィゴツキーは、コフカがゲシュタルト原理は下等な動物の行動にも当てはまるとしたことはゲシュタルトの過剰な一般化をもたらしてしまったと言う。コフカは、ケーラーの実験におけるチンパンジーのような高等動物でみられた知的行為の説明原理として提出されたゲシュタルトの原理をさらに下等な動物の学習やクモやミツバチが示す本能的な行動にも適用してしまった。ヴィゴツキーは、それは先行の研究者たちが人間や高等な動物が示す知的行為は下等な動物の学習とは異なっていることを明らかにしようとしたこととは逆の方向に向かってしまったと言う。本能という下位のものを上位のもので説明してしまおうとしているからである。事実、コフカはハチが近づいていることに気付いて逃げ出すクモの本能的な行動を次のように説明している。「クモはハチがどんな位置や方向からやってきても逃げ出す逃走運動を起こすが、クモの逃走行動を刺激するハチの情報は実に多様であって、決して特定の情報と反応とが固定的に結びついているような固定的感覚説では説明できない。クモもハチの動きや姿勢を形態として把握しているのであって、そこには簡単な形態機能が出現している。そこには原始的な形態(primitive configurations)の特質がみられる。」(コフカ英語版, p.242)。

コフカはさらに続けて次のように言う。「本能や習慣、知能といったもので説明されているものの中心的な役割を果たしているのは、我々が形態原理と呼んでいる単一の原理である。・・・この形態の原理は知的行為を説明するものであり、同時に低級な行動の説明にも使用できるものである。このような説明の仕方は、従来のように低級な行動の説明原理を先に出して、そこから高等な行動を説明していくという方法とは逆の方向である。」(同上, p.244)。もちろん、コフカもこのような説明の仕方についてこの文章に続けて、注釈を加えている。「そうは言っても、ここで犬を愚かな人間と同じように見たり、人間を賢い犬と同じようにしてしまう擬人的な説明に戻ってしまおうというのではない。犬と人間との間に共通の特徴を見いださない限り、両者は違っていると断言しなければならない。我々がここで言いたいことは、知能も習慣も本能も同一の形態原理がそれぞれ異なった条件の下で異なった形で働い

ているということなのである。そこでは、知能、習慣、本能をビューラーが考えたような三つの異なった装置に基づいたものであると考える必要などないのである。」(同上, p.244)。

ここでコフカは人間や高等動物の知的行為と、下等動物の習慣的行動や本能を全く同じゲシュタルト原理で説明しているのではなく、表現形態はそれぞれ異なったものとして表れていることを指摘しており、コフカの言うゲシュタルト原理の内容は相当の幅広い意味を持っていることが分かる。もちろん、これをそのままゲシュタルト原理という共通の説明概念で言ってしまうとよいかということが論点の一つである。例えば、後でふれることになるが、メルロ＝ポンティ(1942)は『行動の構造』で、物質、生命、精神はそれぞれにふさわしい秩序をもち、一つのまとまった構造を作り出していることを指摘している。ここで言うまとまった構造はゲシュタルトのことであるが、メルロ＝ポンティは三つの異なった秩序の絡まり合いによって構造が作られていることを指摘している。特に生命的秩序は人間を含めた生物体がそれぞれの環境に応じた形で作り上げており、その秩序の内容は生物種ごとに自ずと異なっている。さらに精神的秩序は人間のみが持っている独自の秩序を形成しており、それは他の動物にはないものである。このようなメルロ＝ポンティの説明では、ゲシュタルト形成はあらゆる現象に見いだされるとしても、それをもって種類の異なる動物の行動やましてや人間の知的行為を同じゲシュタルトという言葉でまとめることはゲシュタルトの概念に無用な混乱をもたらしてしまうことになる。共通することとして言えるのはあくまでもまとまった構造＝ゲシュタルトが存在するというだけであり、その内実があらゆる生物種に共通であるかどうかはまた別の話なのである。

先の引用文の中でコフカは、ビューラーが知能、習慣、本能の三つを区別してその発現に関して異なった装置を想定していたことを批判して、これらは単にゲシュタルトの表現形態の違いであって、ゲシュタルト原理一つで説明可能であると指摘していた。これはコフカが『精神発達の原理』の中で、ゲシュタルト原理の立場に立ちながら、ソーンダイクの「試行錯誤説」に加えて、ビューラーのいわゆる「発達の三段階理論」を批判している部分である。ビューラーは、人間精神は本能、習慣、そして知能という異なった段階を経て発達していくことを説いているが、コフカはビューラーの言うような多元論を採る必要はないと言う。「全ての過程を神経結合や連合のメカニズムに帰すのではなく、普遍的なゲシュタルトの法則によって発達を完全に説明しようとしていることからすると、一元論の立場である。」(同上, p.251) というのがコフカの精神発達論である。

(3) コフカのゲシュタルト発達論の特徴：動物の相対的刺激反応

コフカは『精神発達の原理』の中で、動物は刺激に対して機械的に反応しているのではなく、提示された刺激の間の構造的関係をもとにして反応していること、つまり下等動物もゲシュタルト原理の原初的なものを用いていることをいくつかの研究をもとにして主張している。ここでも、主に取り上げられているのは、ケーラーによって行われた鶏とチンパンジーを用いた研究である。選択訓練(selective training)の実験では、動物に明暗の異なる二つのカードを出して、どちらか一方(例えば明るい色)を正反応として強化をする。この弁別反応が成立した後に、正反応刺激で用いたカードとそれよりもさらに明るい色のカードを出して、新しく出したカードを正反応刺激にする。このような条件で、正しい選択反応が起きるまでの試行数をみてみると、チンパンジーだけでなく鶏も、短い試行でより明るい方

のカードを選択できるようになっていくようになる。この結果から、下等な鶏であっても最初に提示されたカードの色の相対的な明暗の関係を把握して、それをもとにして次に出された刺激の相対的な明暗の関係によって反応していたことになる。コフカは、ここから下等な動物であっても刺激の相対的な関係である刺激布置 (configuration) を把握して反応しており、まさにこのような刺激の関係を全体的に捉えるような形態把握は最も原初的な反応として下等な動物にも、チンパンジーにもそして生後3か月の乳児にも共通にみられるものであると述べている (コフカ英語版, p.158)。

コフカがこのような刺激の全体的布置の把握を下等な動物からみられる原初形態であるという主張を展開しているのは、彼の『精神発達の原理』の第3章・発達の出発点：新生児と行動の原初形態の中であり、コフカは下等な動物からチンパンジー、そして人間の幼児にも普遍的にみられる刺激や場の全体的把握を可能にしているのがゲシュタルト原理であり、それはまさに原初的なものとして存在していると言う。そもそもコフカがこの著書で原初形態としてのゲシュタルトを持ち出しているのは人間発達にある生得的能力の存在を言いたいからであって、それを説明するものとしてゲシュタルト原理を位置づけているからである。

このように、コフカの発達論はゲシュタルト原理を使った生得論ということになり、ヴィゴツキーがコフカを批判するのもこの点であった。新しい衣をまとった本能論ということである。もちろん、ヴィゴツキー (1930-31) 自身も下等動物が選択訓練課題で刺激の相対的な関係を把握した上で反応していることをやはりケーラーの実験を引用しながら述べており (『文化的-歴史的精神発達の理論』第8章・「注意の習得」)、刺激の相対的な構造把握は原初的なものとして存在していることを否定してはいない。だが、問題はこの原初的なゲシュタルトだけで人間の発達を説明できるのかということなのである。ヴィゴツキーはこの上記の章の中では、人間の場合の選択行動や注意は、大人との関わりの中で親や大人から出される「指示」が子どもの必要なところに注意を向けていくようになる随意的注意の発達のための補助刺激の役割を果たしていること、そして次には子ども自らが出すことばが注意を方向づけていくようになるという。ヴィゴツキー自身は決して生得的なものを排除はしないし、自然的発達を社会・文化の中で身に着けていく文化的発達と共に正當に位置づけている。しかし、ヴィゴツキーはコフカのように、下等な動物も人間にも共通にある原初形態としてのゲシュタルトだけで人間精神を説明することは決してできないと言う。

発達をゲシュタルト原理だけで説明可能であるというコフカの主張は、結局はゲシュタルトが本来持っていた理論の可能性に制限をかけてしまうことになる。「人間精神と活動に与るゲシュタルトとは何であるのか、その働きとは何か」を問うたメルロ＝ポンティの考えを改めて位置づけてみなければならない。その時に、ここで言うゲシュタルトはあくまでも人間が住む環世界の中で作り上げている人間独自のものであって、コフカが言うような下等な動物、チンパンジー、そして人間の場合は単にゲシュタルトの表現形態が違うだけであって、ゲシュタルト原理という共通なものが存在するといったような大雑把な説明で済ませることができるほど簡単ではない。人間精神に限定したゲシュタルト原理として位置づけ直すことが必要なのである。

このようにヴィゴツキーは、コフカのゲシュタルト原理に対し、人間の知能の発達を説明する原理としては不十分なもので、決定的になりえないと述べている。しかしだからと言って、ゲシュタルトの原理を間違ったものとはみなしていない。コフカ自身の問題の出発点、

観点についてヴィゴツキーは「通常、学習は、教え込み、トレーニング、記名の問題として、要するに記憶の問題として純粹に徹底した経験論の観点から提起されてきた。コフカにみられる問題設定の新しさは、学習の問題そのものに重心を移していることにある。かれは、問題全体のこの重心を、記憶からいわゆる最初の新行為出現の問題に移している」（ヴィゴツキー英語版, p.198）と分析しており、その結果導かれたゲシュタルト原理に対しては、「ゲシュタルトの原理は、理論的思想の偉大な確固たる成果としてとどまる。（中略）私たちは、前ゲシュタルト的原理に逆戻りしてはならず、ゲシュタルトの原理に立脚しつつ、そこから前進しなければならない（同上, p.225）」と、心理学を発展させていくためには無視できない重要な原理であると評価している。

このような高い評価は、前述した批判点とは矛盾しない。ヴィゴツキーが問題としているのは、コフカが動物の合目的な行動と人間の知的活動の本質的な違いを検討しなかったために、本来なら「不十分で条件づきの、限られたものである」（同上, p.225）とせざるを得ないゲシュタルト原理を無軌道に拡大し、人間の子どもの発達にもあてはめてしまったことである。動物や発達のごく初期の子どもにも合目的な行為が存在するという事実と、それらの合目的な行動を説明するための原理として留まる限りにおいては、コフカのゲシュタルト原理は正しいとみなしている。

3. ヴィゴツキーのゲシュタルト的知性論批判

(1) コフカのゲシュタルト原理に基づく知性の説明

コフカは動物の場合でも学習は試行錯誤による偶然の積み重ねではなく、場面や状況を見通した目的を持ったものであると主張する。このような行動を可能にするのは、問題の解決に結びつくように場面を見通し、捉えていくことである。それは与えられた問題の解答を導き出すために必要な問題構造を発見する人間の能力や行動と類似のものである。このような知的行為を方向づけているのは問題解決に結びつくように場面や全体構造を把握していくゲシュタルト化であり、これは人間だけでなく動物にも備わっているものである。このようにコフカは言い、チンパンジーを用いた一連のケーラーの有名な研究を詳細に述べながら自説を展開している。ケーラーのチンパンジーを用いた研究内容を詳細に述べるのがこの目的ではないのでその概略を述べることに留める。ケーラーがチンパンジーを用いた研究で意図したことは、目的物を手に入れるために廻り道をしていかなければならない時に、どこまで問題状況を全体的に捉えることができるか、そして問題解決に結びつくような行動を発見できるかどうかを確かめることであった。しかも、大事なことは、ソーンダイクの場合の実験とは異なって、ケーラーの場合には動物は状況の全体を十分に見渡すことができるようになっていた点である。ソーンダイクの実験では問題の解決は動物が行動を起こしたその結果、偶然に起きたことの繰り返しによってしか起きないように設定されているが、ケーラーは偶然によってしか解決できないようなものとは違う課題で動物の行動を見ようとした。そこでケーラーは動物がどこまで迂回路を選ぶことができるか、あるいは適切な手段=道具とその使用に気付くことができるかということを動物の知的行動を把握する基準にしている。つまり、動物がどこまで偶然的な試行錯誤で行動したのか、あるいは問題状況を把握して解決のための見通しを持って行動したか、その違いに注目したのである。

ケーラーの一連の実験では、チンパンジーは明らかに見通しをもって迂回の行動を取っていること、欲しいもの（例えばバナナ）を取るために棒やロープを使ったり、加工することも可能であり、箱を踏み台として高い所にあるものを取るための道具として使うことも可能であった。

これら一連のチンパンジーの行動から、コフカは次のように結論している。「ケーラーの実験からチンパンジーは新しい状況にうまく適応し、これまで経験しなかった新しい問題も解決しているが、それは行動の新しい様式を取ることで可能になっている。ケーラーが述べているように、このような問題解決の方向とその学習の変化は経験によって得られたものではなく、チンパンジーの自らの力によって自発的に行われたものである。・・・ケーラーの研究でみられたチンパンジーの行動の様子から、偶然に依らない全く新しい行動が生み出されていることが分かる。問題の解決は始めに偶然の結果として生じ、その後それを理解するものではない。そうではなくて、理解あるいは状況の正しい変形が具体的な解決に先立って起きるのである。そのようなことからこの種のものを第1次段階の知的行為（intelligent performance）と呼んでおきたい。」（コフカ英語版, p.224）。そして、コフカは動物が一つの問題を首尾良く解決できると類似の問題の解決にも容易に当てはめて解くようになっていくことも指摘している。「学習は決して特殊・個別具体的なものに付随しているものではない。生活体が一つの問題を解くのをうまく習得すると、同じ問題を解けるだけでなく、それまで出会ったことがない新しい別の問題を解くことができるようになる。このような学習はまさに発達であり、決して行動を機械的に積み重ねていくことが学習なのではない。」（同上, p.227）。だから、コフカは、ケーラーの研究は学習の本質についての理論的な重要性ということに留まらず、教育心理学の問題としても直接示唆を与えていると言う。

このように述べた後で、コフカは結論として次のように述べている。「動物の問題の解き方は決して偶然によるものではない。そしてこの問題解決の本質は従来考えられているような習慣となっている既存の諸動作が結合するというようなことではなくて全分野の新たな形態化である。」（同上, p.222）。「ケーラーの実験におけるチンパンジーの行動は全く偶然に支配されない新創造である。問題の解決は、最初に偶然によって出現し、その後これが理解されていくというのではなくて、理解、つまり状況の正しい改造が先ず先に起こり、それが解決となっていくのである。これを叡智的行為と呼んでおきたい。」（同上, p.224）。

ここで注意をしておきたいことは、チンパンジーがいつも直ちに問題状況を正しく把握して、問題解決を行っているわけではなく、何度か失敗をするケースもあるし、個体差、つまり出来の良いチンパンジーも出来の悪いチンパンジーもいるということである。それでも彼らが示した問題解決行動として共通に見られたことは、決して試行錯誤によって行っていないということである。さらに、もう一つ重要な事実を指摘しておきたい。これはこの後のヴィゴツキーのコフカ批判とも関わってくる点であるが、チンパンジーは思考が視覚的場やその状況性に支配されるということである。例えば、手が届かない所にあるものを取るための道具として使ったことがある棒をはるか遠いところに置いてしまうと使うことができなくなってしまふ。視覚的情報、道具がその場にあるということが「道具」として使うことと一緒にしているのである。だからコフカは次のように言う。「棒が道具として用いられるためには、棒が単なる物として見られたり、注意を向けられたりするだけではだめである。というのは、物が道具として使われるためには動物とは関わりを持たない中立的なものとして存在

することを止めて、その場の状況を構成しているものとなっていかなければならない。つまり、物は道具になっていかなければならない。このような道具を使った正しい行動のためには、物を物として知覚するのではなく、知覚の変換が必要なのである。」(同上, p.209)。この知覚の変換がチンパンジーの場合は場に支配されていることが多いのである。

(2) ヴィゴツキーのコフカ批判：ゲシュタルト原理に基づく知性の説明の問題点

ヴィゴツキーは、コフカをはじめとしてケーラー以後の研究者たちは、チンパンジーの問題解決が洞察によるものだというケーラーの説明を他の動物の本能的行為にまで拡張して適用したために、ケーラーの理論的価値を低下させてしまったと批判する。あるいは、チンパンジーの知性を人間と同じような高い水準と見なしてしまった過ちをしていると言う。両者の批判は一見すると逆のことを言っているようにも見えるが、動物と人間の知性を同質のものとしなしてしまうという点では同じ種類のものである。

ヴィゴツキーがコフカを批判していく中で、多くの紙面を割いて詳しく論じているのは、チンパンジーの知能と人間の知能との違いである。実際、コフカが『精神発達の原理』において多くのデータを引用しているケーラーは、彼自身のデータを分析する中で、チンパンジーと人間の道具の使用は見かけ上は類似しているものの、そこには根本的で重要な違いがあることを指摘していたのである。例えば、コフカが引用したケーラーの実験をよく分析してみると、コフカの説明には問題があることが見えてくる。コフカが引用しているケーラーの実験の中で、チンパンジーのチカは箱を踏み台にして物を取ることができたが、同じ箱の上に他のチンパンジーのテルチェラが乗っている状況では踏み台として使うことをしなくなる(コフカ英語版, p.215)。踏み台として使われていた箱が、他のチンパンジーが寝ているという状況によって、寝るための物としか捉えられなくなってしまっているのである。つまり、視覚的な状況によって、問題の解決手段(ここでは箱の用途)が完全に規定されてしまっているのである。

同じような例は他にもある。チンパンジーは棒を遠くにあるものを取る道具として使うことができるが、この棒が自分の取りたいものがある場所から離れた所に置かれてしまうと棒を使うことができなくなってしまう。このようなことが起こるのは、目的物と道具としての棒との関係を視野の中に結びつけられないためである。これもやはりチンパンジーの問題解決が視覚的な状況に支配されているという典型的な例である。ヴィゴツキーは「道具は未来の状況と関係づけていくことを必要とする」(ヴィゴツキー英語版, p.207) こと、そして「状況、つまり実際に知覚された場の構造から道具の意味は独立させることが求められている。それは一般化を要求する」(同上, pp.207-208) と言う。

一方でコフカはこの種のことは人間の思考においても同じような困難が付きまとっているものであり、平たい皿が必要なときに瓶の蓋をその代わりに使うことを思い付かないのと同じだと言い、本質的な違いにはならないと言う(コフカ英語版, p.215)。しかし知覚的な場や状況に拘束されているか、そこから比較的的自由になっているかどうかは大きな違いであるとヴィゴツキー(ヴィゴツキー英語版, p.208)も、そしてメルロ＝ポンティも『行動の構造』の中で指摘する。彼らは人間の思考の特性としてこの状況からの自由こそが決定的に重要であると考えるのである。

例えば、ヴィゴツキーはコフカが挙げた「平たい皿が必要なときに瓶の蓋をその代わりに

使うことを思い付かない」(コフカ英語版, p.215) という人間の思考にも生じうる困難について、コフカの実験とハルトの実験結果を分析して反論する。人間に生じるこの種の困難は、人間が視覚的な情報とは違った意味レベル(社会的なルールや、「蓋」という概念)を有しているからこそ生じるものであり、人間の知性と他の動物の知性との同質性というよりは、むしろ決定的な異質性の現れであると主張する(ヴィゴツキー英語版, p.213)。つまり問題解決の失敗という出来事の共通性に捕らわれて、その質の違いを分析することを怠ったために、コフカは動物と人間に共通にあるものとしてゲシュタルトの原理を過度に一般化してしまうという間違いを犯してしまったのである。

以上のことから導き出されるコフカの発達論の最大の問題点は、動物と人間の環境、ニッチとそこで行うべき行為の種類と内容の違いをゲシュタルトという共通項で括り、これらの違いを単にゲシュタルトの表現形態の違いであると説明してしまっているという点である。問題はこのゲシュタルトの表現形態なるものはどのようなものであるかであり、それを説明しなければならないのである。だがコフカはただ、ゲシュタルト原理が共通にあると言うだけであり、本来の問題への説明になっていない。もちろん人間と動物の間の違いだけでなく、動物の種の間にも違いはあり、ひとまとめにできないのは自明のことである。

ヴィゴツキーは、動物は「視野の奴隷(slave of their visual field)」であるという言葉を使いながら、サルは現前の状況の意味に支配されてしまっていることが彼らのゲシュタルト(構造)的知性の弱点となっていることを指摘する。ヴィゴツキーは言う。「レヴィンの正しい意見によるならば、自由な意志があること、それは本当に道具の使用にとって不可欠なものであるが、これこそが人間を動物から区別しているものなのである。ケラーが何度も観察したように、サルたちは自分の意志でもって所与の感覚的な場の組織(sensory organization)を変えることができなかった。彼らは人間よりもはるかに自分の視野の奴隷である。実際にコフカの著書の中で示されているように(引用者注:先に引用したコフカのチンパンジーのチカの行動についての記述部分)、動物の行動は、視野の構造に奴隷のように依存してしまっている。彼らは与えられた状況の構造的(ゲシュタルト的)特性に支配された意図を生み出しているだけである。レヴィンが言うように、人間には恣意的な行為や意味のない行為を行なおうとする意図を持つという並外れた自由があるということ、そのこと自体が驚くべきことなのである。この自由が文化的人間の特徴なのである。この自由は子どもや霊長類の場合は低い。そして自由であることが人間と動物を区別するものであって、より知的な行為をするかどうかということよりもっと大きな違いになっている。」(同上, p.208)。

要するにヴィゴツキーは、人間とチンパンジーの知能とはその種類、タイプが異なっていると言うのである。この観点を踏まえた上で、コフカの説の評価について、ヴィゴツキーは前の引用文に続けて以下のように述べている。「動物と人間の心理学全てをゲシュタルトという単一の原理だけで説明してしまおうとする自然主義的心理学—そこでは人間の意識を自然の産物としてみてしまい、歴史的な産物としてみることがないが—は現実の事実を前にしていかに無力であるかということとはもはや以上のことを考えることだけで十分である。」(同上, p.210)。このことに関しては、次節でさらに詳しく述べる。

(3) ヴィゴツキーのコフカ批判：人間に特有な対象的行為と意識の形成

マルクス(1844/1932)は『経済学・哲学草稿』の中で次のように指摘している。人間は

動物のように自らの生命活動、つまり生きるためだけの活動には終始していない。人間は自らの生活を対象化でき、意識的な生命活動を行っている点で、動物的な生命活動から袂を分かっている。そして、次のように言う。「たしかに動物も生産はする。蜂やビーバーや蟻は、巣を作り、住まいを作る。けれども、動物は自分または自分の仔が必要とするものしか作らない。・・・動物は目の前の肉体的な欲求に従って生産するだけだが、人間は肉体的欲求を離れて自由に生産し、自由の中で初めて本当に生産する。」(邦訳, pp.102 - 103)。つまり、人間は本来的には自分たちの自由な意志と目的によってものを生産し、自然を人間のためのものとして意識的に加工していく。

さらに、人間と動物の大きな違いは、自分たちの目的に合うような道具を作るということである。ヴィゴツキー・ルリヤ(1930)は『人間行動の発達過程』の中で、マルクスやプレハーノフらの言葉を引用しながら、人間は道具を使うだけでなく、道具を作り出す動物と定義できると述べている(邦訳, p.54)。道具を作るという行為は、今、ここで使うという現在の状況を超えて、将来に備えて、そこで使うための手段=道具を作るという行為であることを意味している。ここには、人間特有の時間や空間に拘束されない自由がある。ヴィゴツキーが「行動の心理学の問題としての意識」(1925/1982)の論文のエピグラフにマルクスの『資本論』からの有名な引用文を掲げているのは、まさに人間と動物との決定的な違いとして人間は自然を加工していくことで自分の目的を実現していくことがあることをヴィゴツキー自身も強く認識していたからである。『資本論』では、クモもミツバチも人間顔負けの物を作り出すが、人間と決定的に違うのは、例えば大工は物を作り始める前にすでに頭の中に表象としてそれらを作り出しているということであり、人間の物作りの独自性が述べられている。そして彼は自然に存在する物の中に自分の目的を実現していこうとする。彼はこの目的を知っており、この目的によって行為のあり方を決定し、自分の意志もそれに従わせるようになる(『資本論』第3編第5章, マルクス・コレクション筑摩書房版, p264)。クモやミツバチが精巧な巣を作るのは本能の形式に従って作っているだけで、彼らが三角形や四角形の簡単なものを作れるかという作れない。彼らは本能的な営みによってそれを行っているのであり、人が労働活動で物を作ることは本質的に異なっているのである。だから本論の議論に話を戻すならば、コフカが動物にもゲシュタルト行為があると言っている、クモが形の良い六角形の巣を作って、見た目ではゲシュタルトを作り上げているようではあっても、この形を作り出しているのは本能なのである。彼らにはゲシュタルト化するか、ゲシュタルト形成の意識があるはずはない。ヴィゴツキーのコフカ批判はこの点ではまったく正しい。メルロ＝ポンティ(1942)は『行動の構造』で、有機体は自分の環境(ユクスケルの「環世界(Unwelt)」)から差し向けられた行為として、エサをつかみ、目標に向かって歩き、危険から逃避する動作を取るという意味では、個々の生物体にとっての目的と意味を持った行動をしている。その点では生物としての主体的行動があることは事実である。しかし、この主体性なるものを人間が行っているもののアナロジーとして説明することはできない。動物、特に下等な動物のそれは彼らが環世界の中で取るべき行動が本能として固定化してしまっており、彼らが取れる行動の自由はきわめて選択範囲の狭い、限定されたものなのである。

以上のような、自然という対象に対する人間の独特の向き合い方として指摘しておかなければならないのは、物を生産したり、対象を加工するという活動を通して、人間の視点から世界を捉え、また同時に自分たちが作り出した世界に自分たちの姿、意識を見るということ

である。つまり、外部という対象との関わりは、反転して自己の内部の意識世界を作っていくのである。外部と向き合い、外部を加工することは、自己の内部、意識を作っていくことになる。ここで重要になるのは人間に特有の表現行為である。人間は対象に働きかけ、その行いから生じた結果を通して、対象と関わっている自己をこの対象に対する経験の中で作り上げ、意識していく。だから物を作るということは同時に自己を作ることでもある。このことは労働活動でもまた芸術表現の場合でも同じである。外に働きかける、加工するという広い意味での表現行為は外に新しいものをつくる制作的活動であると同時に、内部という自己を作る制作的活動でもある。このような内部—外部、あるいは主観—客観の間の弁証法的関係は人間が外部を通して内部という意識を作るという独自性があることで意味を持っている。労働の場合、自分たちの生産活動が正しく生産物の価値として反映されなくなってしまうと、自分たちの生産活動は自分達と関わりを持たなくなり、自己を見出せなくなるという疎外の意識が生じる。動物にはこのような疎外という意識は生まれることはない。自己意識というものは、はじめは自己も不明な即自の段階が、外部や他者との関わり（対他関係）を経て、自己を意識化できる対自の段階になっていくという形で発達していく。これが人間独自の世界である。だから人間以外の動物には芸術的表現行為は無い。動物は土偶や埴輪の類を作らないし、チンパンジーが絵筆を握ってキャンバスに絵を描くようなことをしても、それはなぐり書き以上のものではない。表現行為は自己の外と自己の内の両方を作り出していく。そこでは形をまとめ上げるというゲシュタルト的行為はある。しかし、このゲシュタルト形成が持っている意味、その生成の成果がもたらしてくれるものは人間と他の動物では異なる。

4. ヴィゴツキーのゲシュタルト発達論批判

ヴィゴツキーはゲシュタルト心理学、特にケーラーの研究について多くの著書の中で取り上げ、とりわけその当時、主流であった行動主義の心理学からの脱却を計ることになった記念碑的な研究として高い評価を与えている。ヴィゴツキーは言う。「周知のように、ケーラーの著作はそれまで主流であったソーンダイクの機械論的な考えに対して異論を唱えるものであった。彼の著作は根本的に重要である。ケーラーはチンパンジーは決してロボットのような自動機械ではないこと、彼らは理知的に行為していること、動物が示す洞察的操作は試行錯誤の偶然の積み重ねや、個々の要素を機械的に寄せ集めることによって行われているのではないことを明らかにした。これはどのような発達の問題を解いていくためにも決して手放してはならない理論的心理学の確固たる、揺るぎない成果である。」（ヴィゴツキー英語版, p.210）。つまり、ヴィゴツキーはゲシュタルト理論を全面的に否定しているわけではなく、その重要性を認めつつ、すべてをゲシュタルトの問題として一括りにすることに異を唱えているのである。

そこから見えてくるヴィゴツキーのコフカの発達論への次の批判は、コフカがチンパンジーと人間に対して共通のゲシュタルト原理をあてはめ、さらにはこのことから子どもの精神発達の原理はゲシュタルト形成で説明できると結論したことである。これまで再三述べたようにヴィゴツキーにとって、ゲシュタルト原理は人間の発達の重要な部分ではあるが中心ではない。ヴィゴツキーのゲシュタルトに対する問題意識は、ゲシュタルトを人間の発達の中にどう位置づけるかというものである。

本節では、コフカのゲシュタルト原理だけではなく彼の発達論（もっとも、この発達論自体がゲシュタルト原理を軸に展開しているが）とそれに対するヴィゴツキーの批判を見ることで、コフカの発達論、ひいては人間の発達におけるゲシュタルト原理の限界を明らかにしていく。

（１）コフカの幼児期のゲシュタルト構成

それではゲシュタルト原理以外のコフカの発達論についてヴィゴツキーはどう言っているのだろうか。これがヴィゴツキーのコフカ批判の後半部分である。ゲシュタルトと意味生成、その差異についてヴィゴツキーは検討を加えようとするが、ヴィゴツキーの主張のポイントは以下の点である。

1) 知覚の連続として記憶を考える間違い

ゲシュタルト原理は、明らかに人間は世界を有意味化するという人間精神の根源、原初にあるものを指摘している。このことを明らかにしたゲシュタルト心理学の成果と意義を否定することはないが、ゲシュタルト原理は初期段階からより高度な思考の段階へと発達していく転換の過程については説明していない。つまり人間の有意味的活動をどこまでゲシュタルトで説明できるのかという疑問が残ってしまうのである。このことと関連して、例えば記憶についての問題がある。

コフカが記憶のことを述べているのは『精神発達の原理』の第5章の第1節・記憶：初期の記憶と、第2節・記憶の法則の部分である。コフカがこの第5章で、人間の精神発達を特徴づけているものとして挙げているのが、記憶表象とその発達初期の特徴である。ここで、コフカは時間と空間的制約を超えるものとして人間が有している記憶の機能に注目する。そして、コフカはこの記憶作用と知覚とは相互に関係していることをいくつかの具体例を挙げながら述べている。記憶心像という言葉があるように、以前に見たことがあるという記憶は知覚することに作用することがある。乳児の場合でも、新しい部屋に連れて行くと驚き、目を見張るが、いつもの部屋に戻るとその驚きは消失してしまう。このような事例を上げながら、ここでもコフカは記憶作用をゲシュタルトの原理で説明する。以前に持った記憶と新しく出会った場面をどのように捉えるか、前と同じか、新しいものかを決めるのは表象の比較であり、それはゲシュタルト化によって可能であるというのである。さらに、コフカはシュテルンが自分の娘がスプーンを使ってスープを飲むことが出来なかったのが、馴れてくるとスプーンを近づけると口を尖らせて飲む動作をするように変わっていった例を上げている。シュテルンはこのことを期待表象によって説明しているが、コフカは何も表象などというものを使って説明する必要などはなくて、子どもが食べ物を食べさせてもらう過程を一つのゲシュタルトとして把握するようになったのだと説明した。だから記憶は新しい行為を展開する際にも「現在」の延長、「未来への期待 (expectation directed towards the future)」(コフカ英語版, p.256)としてまさに現在と未来を構造化、ゲシュタルトとして捉えることができると説明する。

以上のコフカの記憶の説明では、知覚と記憶の二つの作用の間がどのような関係になっているのかを問うことはない。あくまでも両者を全体的なまとまりのあるものとするゲシュタルト化の働きだけで説明している。従って、そこでは表象作用やイメージという用語は出てこないし、その必要がなくなる。たしかに知覚と記憶は決してばらばらに働いていない。し

かし、知覚で記憶は説明できないし、逆の場合も同じである。イメージにしても物的イメージから運動イメージ、遂行イメージ、そして心的イメージと実に様々なものがあることはよく知られていることである（サルトル, 1940；滝浦, 1972）。さらには、ベルクソン（1896）は知覚と記憶の連続を問題にし、両者の間の複雑な関係と二つの間で起きている過程についての難問を『物質と記憶』で解こうとした。ベルクソンがこのように問題を設定した理由は知覚と記憶の問題は人間の意識の問題を解くために避けては通れない問題だと考えたからであり、どちらか一方だけで説明し尽くせるものではないからである。ここからも、コフカは記憶と知覚とをゲシュタルト原理で一括りで説明してしまい、ゲシュタルト原理の過剰なる一般化の過ちをしてしまった。これが過ちであることは誰の目にも明らかである。

ヴィゴツキー自身はコフカの説明に対して次のような問題点を指摘する。「このような記憶の原初的ゲシュタルトが能動的な想起を行うようになっていくのかということについて、ゲシュタルトの原理は何も説明していない。」（ヴィゴツキー英語版, p.219）。このようなヴィゴツキーの批判は、人間の思考とその発達を視覚的ゲシュタルトでもって説明することはできないという指摘へと展開していく。

2) 視覚的ゲシュタルトでは人間の思考を十分に説明できない

ヴィゴツキーはコフカの著書について、「子どもの発達過程で発生するゲシュタルトと、生まれつき与えられているゲシュタルトとの、単に事実上の相違ではなく、本質的な相違がどこにあるのかという問題に対する答えをいくら望んでもこの書には見いだせない」（ヴィゴツキー英語版, p.217）と指摘する。この一文は、単にゲシュタルト原理の不足点を挙げたものではなく、発達初期に存在する原初的なゲシュタルト的心性を認め、その変化を検討してこそ、人間発達におけるゲシュタルト原理を明らかにできると主張するものである。つまり、動物のゲシュタルトをそのまま人間の知性に当てはめるのではなく、人間に固有の知性が発生・発達していく過程の中でのゲシュタルトの意義や、原初的ゲシュタルトが変化していく姿を捉えることが必要だということである。

そのために重要なものとしてヴィゴツキーが挙げたのが、ことばである。ヴィゴツキーは言う。「私たちはことばの意味（word meaning）の助けによってはじめて概念の抽象的思考が可能になっている。猿には不可能な人間だけの活動が可能になっているが、その本質というのは視覚的に知覚したもの、視覚野のゲシュタルト的把握に基づいて行動をするのではなく、思考によって行っていることなのである。」（同上, pp.219-220）。

ヴィゴツキーは、フォルケルトやゲルプ、ジェームズの論を引きながら、人間の知性に固有の特徴は、具体的な状況から思考を解放させること、想像力を働かせられるということであるととした。このことは前節の第3項でも言及した。そして、そのような知性の重要なファクターとしてヴィゴツキーはことばの働きを挙げる。このことばというファクターが介入することによって、原始的なゲシュタルトの性質も変化するのではないか、ということをヴィゴツキーは述べている。

前述のようにヴィゴツキーは人間は視覚的形態に支配されない思考を発達させていくと結論づける。だからヴィゴツキーは、「意味とゲシュタルトは全く異なる二つの起源から発達している」（同上, p.220）と幾分断定的に言う。このように述べた後の文章で、ヴィゴツキーは次のような興味深い、コフカの説明とは相容れないような例を挙げながら説明している。

チェスを知らない人、初級、中級、そして上級のプレーヤーはチェスの盤面に置かれた駒の配置をどのように知覚するかというとそれぞれ異なった見方をする。つまり、チェスをした経験とその程度によって知覚的体制化の仕方、つまり知覚的意味の捉え方は変わってくるというのである。まさに、それはゲシュタルト原理だけでは説明できないことである。チェスの経験の違いが、駒の動きやその役割が持っている意味的性質について理解の仕方の相違として表れるのである。つまり、チェスの上級者とチェスを知らない人とは、チェスの盤面の見方、駒の配置の記憶の仕方が大きく異なっているという結果である。明らかにゲシュタルト化されたその質が異なっているのであり、単純なゲシュタルト原理による説明とは説明の水準とその内容が違うのである。このようにヴィゴツキーが述べていることは、今日、認知心理学における知識のデータベースの質と量、特に質的内容が記憶をはじめとした思考活動に大きく影響を与えていることを指摘している熟達研究 (expert-novice) で明らかになっていることと同じである。これは驚くべきヴィゴツキーの先見性である。解くべきことはゲシュタルト的知覚ではなく意味的体制化の問題である。ヴィゴツキーは人間がばらばらにある星を星座として見るのはケーラーが言うようにゲシュタルトによって組織化されているのは正しいとしながらも、だが、同じカシオペア座を見ている時でも天文学者がそれを見ている時と天文学を知らない人とはそこには異質なゲシュタルトがあると言う。

西田幾多郎 (1911) は『善の研究』の第2編・実在の第3章・実在の真景の中で、彼の中心的な概念である「純粹経験」の特徴を論じている中で、星座をみたハイネと科学者の見方の違いをハイネの詩 (ハイネの詩集『北海』の中の「夜の船室にて」) を引用しながら次のように述べているくだりがある。「普通には主観客観を別々に独立しうる実在であるかのように思い、この二者の作用によりて意識現象を生ずるように考えている。したがって、精神と物体との両実在があると考えているが、これはすべて誤りである。主観客観とは、一つの事実を考察する見方の相違である。精神物体の区別もこの見方より生ずるのであって、事実そのものの区別でない。・・・ハイネが静夜の星を仰いで蒼空における金の鉞といったが、天文学者はこれを詩人の囁語として一笑に附するのであろうが、星の真相は反ってこの一句の中に現れているかも知れない。」(小坂・全注釈版, pp.155-156)。西田の言う純粹経験とは、直接経験、原経験と同義であるが、主観、客観が合一したものである。そこでは、外部の事実、実在によって与えられる経験そのもの、その日常的な感覚・知覚であり、同時に理性的な知や情意的なものも含められている。このように言うとはなはだ概念としては不明、かつ茫漠として印象を持たざるを得ないが、あえて西田が「純粹経験」というウイリアム・ジェームズ由来の概念を使って言いたかったことは、知情意が分離される以前の、主観・客観の対立もない、反省以前の直接的な経験であり、意識として立ち現れてくるもの、それ自体の存在である。だから、ハイネのこの詩を引用した文に続けて、西田は次のように言う。「かくの如く主客の未だ分かれざる独立自全の真实性は知情意を一つにしたものである。真实性は普通に考えられているような冷静なる知識の対象ではない。」(同上, p.156)。

たしかに私たちはどうして星を星座としてゲシュタルト化してしまっているかということ、そこには神話として登場してきた人や動物、物などの様々な言語化された物語があり、それが星座として知覚的なゲシュタルトを促したことは間違いがない。同時に、このような物語として登場してきているものを星座に当てはめていくためにはゲシュタルト原理が根源的なものとして人間の中に存在していることを否定することもできない。つまり、ヴィゴツキー

は、根源的に存在する視覚的なゲシュタルトと言語的な意味の把握とが相互に関係することで生じる有意味性が、人間の知的活動の中に存在し、それこそ人間に独特のゲシュタルトのありようであることを指摘する。さらに言えば、個々人の中で発達していくゲシュタルトは、比較的共有可能な視覚的なゲシュタルトを根源として持ちつつ、文化や個人の人生にも大きく左右されていて各人一様ではない。そう考えると、コフカが『精神発達の原理』の最終章で提示した「大人の世界」「子どもの世界」という対比にみられるような、単純な置き換わりや大人の問題のコピーなどというメカニズムでは、人間の心理におけるゲシュタルトの発達は語れないことになる。

つまり、人間に存在するゲシュタルト的心性そのものに関しても、コフカの原理では不足があるということである。この問題についてはメルロ＝ポンティがゲシュタルト形成と言語の問題を論じており、そこで改めて議論をする。

(2) ヴィゴツキーのコフカ発達論批判

コフカ『精神発達の原理』の第6章は、幼児の遊びからみた子どもの世界についての記述である。コフカは、幼児が世界を捉える基本は事物を自分と同じように生命を持っている、心を有しているという擬人化であり、唯心論であると言う。そしてコフカは、子どもが自分の周りにあるものを生があるものと生がないものとを区別していく大きな手がかりとなっているのは、表情があるかないかという知覚的なゲシュタルトが発達してくることに依っていると説明する。さらには、反応があるものは生きていう判断材料となるし、情緒的な反応、例えば苦痛を与えると泣いたり、嫌がるという反応があるかどうかとも生と非生との区別になっている。コフカはこのような二つの違いを区別する形態（ゲシュタルト）の発達が大きく関わっていると結論する。ここでもゲシュタルト原理による説明がなされている。ところが、幼児の遊びにみられる行動については矛盾するような説明が出てくる。コフカは、幼児の場合は行動の時間的連続性（コフカはこれを時間形態と称している）がなく、事物に向ける行動にも一貫性がみられず、そこではゲシュタルトの未完成な状態が多く見られると言う。例えば、遊びの中で演じる役がある時は兵隊さんであったり、ある時は別の仕事をしている人というように変わるし、木片を赤ちゃんとして扱うかと思えば、それを火の中に投げ込んで燃やしてしまうこともする。幼児は彼らの生活の一つひとつが何の関連も持たず、時間的なまとまりを持たない、つまり、彼らの行動レベルでのゲシュタルト化は未完成な状態であり、そこでは大人と幼児の間を区別しなければならなくなる。

このようなコフカの記述に対して、ヴィゴツキーは彼のゲシュタルト原理による説明は一貫性がないと批判する。つまり、コフカはゲシュタルトは発達の最初期からあると言っていたはずである。しかし、子どもの生活の中で見られる行動には時間的なまとまり、ゲシュタルトがないと言う。ヴィゴツキーはコフカの説明をつぎのようにまとめている。「コフカが子どもの発達過程には構造がないことをどの程度まで描いていたかを知るためには以下のように述べていたことを上げるだけで十分である。最初は互いに独立し、併存している分子構造がある。発達というのはこれらの構造（ゲシュタルト）の範囲と大きさが変化していくことである。このように、発達の最初期では構造化されていない分子の混沌とした状態であったものが、次第に結びつき、現実と統一した関係を作っていく。」（ヴィゴツキー英語版, p.230）。コフカは幼児と大人の間ではゲシュタルトのまとまり方に違いがあり、このゲシュタルト化の程度

で発達を説明しようとする。コフカはゲシュタルトは人間を超えて動物の行動を支配する原理であると言い、また人間の発達の最初期からゲシュタルト的行為はあるとも言っていた。しかし、コフカは彼の著書の最終章では、ゲシュタルトの構造化の程度そのものが変わる、それが発達だと言ってしまふ。コフカにとっては何でもゲシュタルトである。それを都合良く使っている。このようになってしまふと逆にゲシュタルトでは何も説明できないことになってしまいかねない。

また、ゲシュタルトの変化についての記述に目を向けても、発達の過程で不完全で未熟なゲシュタルトが、上書きされる、あるいは置き換えられることで、より包括的で合理的になっていくことが精神の発達であると述べているだけでそれらの間の移行のメカニズムについては何も述べられていない。

それに対してヴィゴツキーはゲシュタルトに関して、「ゲシュタルト原理の本質は、子どもの発達過程において生じる新しいゲシュタルトは、表面に浮遊しているものでも、発達の始まりから存在している原始的、原初的なものから孤立しているものでも、それらと融合するものでもない」（同上、p.225）と述べている。この記述からも分かるように、発達によって生じるゲシュタルトと、原始的なゲシュタルトとの関係は、断絶や単純な融合ではないというのがヴィゴツキーの見解である。彼の考えるゲシュタルトの発達の姿は、原始的なゲシュタルトという自然的なものと、ことばという文化的なものとの合流によって、心理全体のシステムが変革した結果、心理システム内におけるゲシュタルトの位置づけが変化し、新しい有意義性のとらえ方が生じるというものである。この考え方は、ゲシュタルト原理の根本的な考え方である「部分の働きは全体の構造に規定される」という思想に立ち返るものである（ここでの部分、全体はそれぞれゲシュタルト的知覚と心理システムのことである）。

つまり、原始的なゲシュタルトと言語との統一による新しい有意義性の発生という構造こそ、ヴィゴツキーの仮定した、発達におけるゲシュタルト原理の位置づけであると考えられる。そのような発達の構造や動態を仮定し、その全体の中でゲシュタルトの働きや変化を明らかにすることが人間の発達と人間のゲシュタルトを正し理解するため必要だと彼は主張したのである。

(3) ヴィゴツキーのレヴィンに対する位置取り

ここまではヴィゴツキーによるコフカのゲシュタルト原理への批判を紹介してきた。しかし、ヴィゴツキーはゲシュタルト心理学のすべてに否定的というわけではない。ヴィゴツキーがゲシュタルト学派で重要視してきたと思われる人物としてクルト・レヴィンがいる。そこでここでは、レヴィンに対してヴィゴツキーはどのような取り上げ方をしているのかを見ていくことにする。

ヴィゴツキーは彼のいくつかの著作の中でレヴィンについても言及している。しかし、同じゲシュタルト原理にもとづいた発達論を展開するコフカとはいくぶん違った観点でレヴィンのゲシュタルト原理による発達論の可能性を位置づけようとしている。

レヴィンは知覚や記憶などの限られた局面で使用されてきた力学説を情動の研究に取り入れようとしたゲシュタルト心理学派の研究者である。彼は力学説に基づき児童心理学や社会心理学に対して場の理論の適用を提唱し、その有効性を示した。レヴィンの研究は情動や意志が行動に与える力がテーマである。彼によると意志行動を支配する力というのは、場のゲ

シュタルト構造内に存在する行動の源となる力である。場のゲシュタルト構造内のある部分や全体の力の配分によって、一定の行動が行われるというのがレヴィンの主張である。この時の場の力というものが情動である。レヴィンの言う情動は何かをしたという欲求であったり、逆にやりたくない、避けたいという気持ちということになる。この情動が場の中でどこに向かって働いているかにより、個人の行動が現れることになる。レヴィンは場の力関係の均衡と推移を具体的な条件設定において研究を行った人物である。レヴィンは場の理論を利用し、個人がある環境（グループ）との関わり方によりどのように行動が変化するかという研究を行い、社会心理学に多大な貢献をした（レヴィン, 1950）。また、彼は場の理論を発展させてトポロジー心理学を提唱した。トポロジー心理学での環境としての空間とは、物理的に測定可能な領域以上に心理的な距離や興味といったものが、人間の行動に影響を与えるという理論である（レヴィン, 1936）。

このような研究を行ったレヴィンに対するヴィゴツキーの評価はコフカに対する評価と比べやや肯定的である。ヴィゴツキーは「心理システムについて」（1930）の中で、「K・レヴィンは、心理システムの形成が人格の発達と一致すると正しく述べている」（邦訳, p.36）と言う。心理システムという考え方は個々の機能だけで人間の心理全体は把握しきれないという考えであり、レヴィンの考え方はヴィゴツキーの心理システムの考えに類似している部分がある。ヴィゴツキーは心理システムについて次のように述べていた。「すべての問題が機能内だけでの変化にあるのではなく、そこから生ずる結合の変化と無限に多様な運動形態にあり、一定の発達段階で新しい総合、新しい連結機能、それらの間の新しい結合形態が生じるという信念である。私たちは、システムとその運命に関心をもたねばならない。」（同上, p.36）。このようにヴィゴツキーの研究は個々の機能の発達に向けられるのではなく、総合されたシステムとして人間の発達を捉えることにあるといえる。

ヴィゴツキーの心理システムは人間の精神としての人格がどのように構築され機能するかという問題を扱っているといえる。また、ヴィゴツキーによる人格の発達についての考え方は、機械論的にあれこれの心理機能が諸々の出来事に一対一で対応しているのではなく、諸機能同士が総合的に複雑に絡み合った中で人格が作られるというものである。そしてレヴィンは、連合心理学が主張するような、ある刺激に対応した反応の連合によって人間の心理が機能しているという考え方を否定する。彼はヴィゴツキーと同じように人間の行動様式が、刺激と反応とが単純な一対一の対応をしたり、機能同士の連合の強弱といった機械論的な仕組みによって構築されているのではないと考えた。記憶に残らないような小さな経験が全体の中で意味付けされ、ゲシュタルトとしての個人の人格が構築されると主張した。このようなことから、ヴィゴツキーはレヴィンの人格に関する考え方が、自分の人格の問題への考え方と類似しているという評価を下している。レヴィンは経験という側面から人格について述べようとした試みである。これを明確に述べているのが『パーソナリティの力学説』（1935）である。ヴィゴツキーとレヴィンの考え方の違いは、レヴィンの方が環境の中でどのような経験をするかについて行動レベルで重視して考えた点である。

レヴィン（1935）は連合心理学によって説明されたものは、現実の行動を正しく捉えていないと考えた。レヴィン（1935）は機械論的な固定的な結合として我々の生活は成り立っているのではなく、時間的に広がった全体が人間にあり、断片や要素の固定的な連結が人間内部で起こっているのではない（邦訳, p.47）としている。そのため、「習慣によってつくられた連結は、

そのままでは決して心的事象の動力にはならない」(同上, p.47) という立場を取っている。一般的にはゲシュタルト学派と位置づけられているレヴィンだが、彼はコフカのように完全にゲシュタルト原理で全てを説明しようとするには慎重である。レヴィンは、「人間は断片的連合の形成ではなく全体の動作つまりゲシュタルトの新編成によってのみ心的活動をしているわけではない」(同上, p.47) とし、ゲシュタルトのみによる人間の心的事象の説明では不十分であるとしている。ゲシュタルトのみによって人間の精神の解明を求めるのではなく、何故ゲシュタルト化された姿として人間の精神は行動に反映されるのかということに研究のベクトルが向けられた。そのため、レヴィンの課題とは「心的結合は事象の原因にはならないため、原因となるエネルギーがどこから生じるのかをそれぞれの心的事象について探求しなければならない」(同上, p.48) となっている。つまり、人間の欲求や意志の発生の根源を探ることがレヴィンの目的となっていたのである。

そこでレヴィンは人間の欲求や意志が活動を定める重要項目であると考えた。そして彼は、欲求や意志は個々の人間が経験を通して形作るものであるとみなした。レヴィンの考える経験はひとつひとつは重大な力を持っていないが、人生の中ですべての総合された経験がゲシュタルトとして機能し、人間の欲求や意志、すなわち人格を作成していくことになるとしている。そして、経験を重ねる場所が個人にとっての環境であるとしてユクスキュルの「環世界論」を挙げている(同上, p.79)。レヴィンはここで意味としての環境の中で人間は活動し生きているということを示そうとした。つまり、ゲシュタルト的体系と人間の何かをしたいという欲求や動機との掛け合いが心的活動を支えているというのがレヴィンの主張の大枠である。

ヴィゴツキーはレヴィンによるゲシュタルトの扱い方に対しても肯定的である。ゲシュタルト学派として挙げられるケーラーは、動物の持つゲシュタルト的知覚を認めつつ、人間と違って動物は視野の奴隷であるという考えを出している。しかし、コフカはすでに本章の第2節2)で述べたように、ゲシュタルトの考え方を拡大し、人間にも同じようにゲシュタルトは働き、知性と本能の間に明確な境界線はないという主張を行った。これに対するヴィゴツキーの批判はすでに述べてきた通りである。

それではレヴィンはケーラーの発見をどのように受け取め、動物のゲシュタルト的知覚と人間の知性とは何が違うと考えたのだろうか。そしてそこから導き出されたレヴィンの見解をヴィゴツキーはどう評価したのであろうか。レヴィンは人間の特徴には行動の自由があるとしている。その自由はチンパンジーとは比較にならないほどであり、人間は発達によって行動の自由を獲得していくとしている。また、人間は視野のゲシュタルトから解放されることにより、行為に意図を創りだすことが可能であり、眼前の状況から解放された意図こそ人間と動物を分ける境界線であるとした。レヴィンは人間にとって大切なのは自由意志の存在であると考えた。行為する欲求や動機の中に人間性の本質を見出したことになる。レヴィンが試みようとしていたのは欲求が行為をどのように誘うかということであり、行為へと誘うシステムとしてゲシュタルトという概念が利用可能であったということである。

ヴィゴツキーがゲシュタルト学者の中でもレヴィンに対しては特に高い評価をしている理由はこのような観点にあった。しかし同時にヴィゴツキーはレヴィンの行動の背後にある欲求と動機の捉え方について批判をしている。そのことはヴィゴツキーの『障害児発達

論集』に収められている「知的障害の問題」(1935)の中に見られる。

レヴィンの行った知的障害児と健常児の実験は、作業の心理的飽和、作業が他者により中断された場合の作業復帰、作業の代償行動を見るものであった(レヴィン, 1935)。ヴィゴツキー(1935)は『障害児発達論集』の「知的障害の問題」で、レヴィンのこれらの追試実験をしている。本論文では作業の心理的飽和についてのみ取り上げる。ヴィゴツキーは心理的飽和実験の他にも作業が他者により中断された場合の作業復帰、作業の代償行動の追試実験を行っているが、レヴィンへの批判の焦点は心理的飽和実験で十分に説明が可能であるのでそれらは省略する

レヴィン(1935)の行った心理的飽和実験とは紙に月の顔を飽きるまで描かせるというものであった(邦訳, p.209)。子どもは紙に顔を描いているうちに次第に書くことへの興味を失い、やがて描くことをやめてしまうことになる。レヴィンはこの実験において、知的障害のある子どもは作業の最中に休憩を頻繁にしたり、関係のない遊びに興じながら顔を描くという結果を得た。この時、知的障害の子どもと健常児の間で飽和に達するまでの時間と描いた顔の数にはそれほど差は見られなかった。しかし、知的障害がある子どもの場合には、眼前に他の興味が見れた時に、頭の隅に置いておいて作業を継続することはできない。誘惑に対して無防備に引き込まれてしまい、手を止めてしまった。ここからレヴィンは知的障害のある子どもは精神的な分化が不十分であるため、ひとつのことに執着する傾向があるとした。また、その特徴として今行っている作業を簡単に投げ出す情動のもろさも同時にあると指摘した。

ヴィゴツキー(1935)はレヴィンのこの研究に対して、「情動を発達の外で、ほかの精神生活との関連を抜きにして捉えてしまっている」(邦訳, p.119)とし、レヴィンの行った実験の心理的飽和に「意味」を持たせるという要素を追加した課題を与えてみた。ヴィゴツキーは描くことに飽きてしまった子どもに再開を促す際、子どもに対して「友達に教えるためにもっと顔の絵を描いて欲しい」と言い、作業を再開させた。このように作業再開に意味を持たせた場合には、知的障害の子どもよりも健常児の方が積極的に作業を再開するという結果が得られたのである。

ヴィゴツキーは、レヴィンの研究に対して「なんらかの行動が、他の行動に対して代償機能を持ち得るには、それらに対応する力動機能システム(a)と(b)とが、統一的な力動的全体の独立性のない部分を構成している必要がある」(同上, p.112)とし、現実の知覚の性格はそれに対する行為の性格をも決定すると言う。つまりヴィゴツキーによるレヴィンの行った心理的飽和の実験への批判は、現実の人間の行動には意図や意味があり、これに基づいて行動するということを実験では忘れてしまっているということである。実験で行動に目的を加えることで子どもの反応には違いが生じるはずであるし、意味も目的もない行動では人間の活動を捉える事ができないということがヴィゴツキーの批判点である。

ヴィゴツキーはレヴィンの理論と実験は知的障害の本性に関する問題の回答を知的障害の子どもの知能の研究に直接求めるのではなく、彼らの持っている意志や欲求の特性に求めようとしたとしている。レヴィンの実験では知的障害の子どもは心理的飽和後の代償行為がほとんど同じ場合のみ、代償行為に効果があり、健常児より柔軟性に欠ける結果であった。ヴィゴツキーは飽きるまで顔の絵を描かせる実験に、「友達に書き方を教える」という意味を与えることにより、知的障害児と健常児の実験結果はレヴィンの結果とは逆転してしまった。ここからヴィゴツキーは知的障害児の情動について、何か他の代償行為をする場合にはほとんど

ど同じ内容の場合にしか代用が効かず、生活上の意味を付与しても効果があまりないという結論を導き出した。

ヴィゴツキーは、レヴィンの実験を意志や目的といった高次の発達を無視したまま、意志や目的を伴わない低次としての発達のみを知能の本質としているとし、そのため知能の豊かさが注目されずに置き去りにになってしまっていると言う。精神発達の最も重要なことは、知能と情動との間の関係の変化であるはずだとレヴィンへの批判を続ける。

ヴィゴツキーが追試実験で言いたかったことは、人間の活動の中には必ず意味があるということである。この意味という要素を取り除いてしまえば、人間の本当の姿としての活動は見ることはできなくなってしまうということが主張の中心に据えられる。レヴィン(1935)はその主張の中に「生活空間」という言葉を用いている(邦訳, p.188)。「生活空間」とは人間が活動している空間であり、意味の中での活動に人間が生きているということである。ヴィゴツキーはレヴィンの最初のスタンスは正しく評価できるとしているが、研究を行っていくうちに本来レヴィンが目指したであろう、人間の姿の研究がされていないというのがヴィゴツキーの批判であった。

レヴィンが示そうとしたことは、知的障害の子ども一般的な情動の姿であった。ヴィゴツキーの言うところによると、レヴィンは健常児については意図や動機の中身を検討してきているが、知的障害の子ども問題の時にはすべて一般的な知的障害児の姿として括ってしまっている。意図や動機の中身が消えた法則一般についてレヴィンは検討し、失敗してしまったということになる。

つまり、ヴィゴツキーのレヴィンへの批判はその原理批判や主張の内容に対するものではなく、研究の方法やデータの分析の仕方に対するものであった。

レヴィンが生涯目指したものは、「人間行動を解明する一般理論と、個別的な特殊な事例の具体性との間をつなぐ橋をつくることであり、どのような個別的な事象をもそのままに収容できるような理論を構成したいというものであった」(同上, p.289)。このことは、精神内において培ってきた経験(P)が環境(E)と交わり、人間の行動(B)になるというレヴィンの代表的な法則「 $(B) = (P) \times (E)$ 」が如実に語っているといえる。

レヴィンが実験によって得られた知的障害の子どもデータのデータを一般化し、現実の発達状況が無視して知的障害の問題すべてに適用しようとしたのは必然なのかもしれない。

5. ヴィゴツキーのコフカ批判からみえてくるヴィゴツキーが未解決にした問題

(1) ゲシュタルト：言語以前の根源的な世界把握

ヴィゴツキーがコフカの発達論を批判する視点は一貫している。ヴィゴツキー(1934)は意味とゲシュタルトは全く異なる根源から発達すると断定する(日本語版, p.121)。しかし、ここには未解決な問題がある。ヴィゴツキーのこのような主張は、ことばの発達と関連づけて思考の発達を説明しようとする立場からのものである。だが、思考はこれだけでは説明できない。例えば、かつて「イメージは絵か言語的命題か」といういわゆるイメージ論争が認知心理学の中にあった。この論争の結論として、言語的符号化だけで完全に説明できないイメージは存在すること、そしてそこでは、言語的モードと非言語的モードは相互に関連し合っているというきわめて穏当な結論を出しているだけであって、例えば、メルロ＝ポンティ

が生涯にわたって問い続けた「無言のコギトは存在し得るか」、つまり言語が介在しない認識や思考活動はあるかという問いについて未だ十分な説得的な答えは出せていない。

この問いに取り組んだ上でなければ、人間の心理やその発達におけるゲシュタルト的心性の正しい位置づけは不可能である。ことばと結びついた心理機能が部分—それがどんなに広大であろうと—に過ぎないとすれば、ヴィゴツキーがゲシュタルトの原理から取り入れ、コフカに投げかけた「部分の働きは全体の構造に規定される」という指摘が、ヴィゴツキーの理論への批判ともなりうる。言語的モードがあくまで“部分”であるならば、非言語モードも含めた意識“全体”によって働きが規定されるはずだからである。

一つの具体的な例で考えてみよう。廣松渉(1972)が『世界の共同主観的存在構造』の中で、子どもが牛を見て、「ワンワン」と言った時、私たちは子どもが牛を「ワンワン」と言った意味を理解することができる。もちろん、牛がイヌでないことを私たちは知っているし、子どもが間違っ「ワンワン」と言っていることも分かっている。この状況で、私たちの中で起きていることは、牛のことをワンワンと言っている子どもの発言を理解できる私と、牛は牛であることを理解している私とが併存している。つまり、二つの意味世界を矛盾することなく、結びつけている私がいる。これは言葉を文字通りの社会的な共通の意味、「語義」のレベルで理解しているのではなく、個人が発した一つの言葉で意味していること、つまり言葉の「意味」レベルで理解していることである。しかも、私たちはこの二つをつなげて考えることもできる。この二つのいわば二重化構造を可能にしているものは、ヴィゴツキーが言う意識であり、もう少し彼の用語を使って表現すれば、「心理的システム」である。それは、意味レベルでの「ゲシュタルト化」そのものである。そうすると、個人の意識内容とそれを互いに他者がどのようにして理解しているのかということが問題になってくる。

これを別な形で言い直すと、西田幾多郎が彼の研究の後半の時期になって主張をした述語面での意味理解と共同理解の問題になる。西田幾多郎は、述語的に関わること、つまり上の例で言えば牛を見て、「ワンワン」と呼んだ、この表現行為とその場でこのような形で発せられた状況が私たちの意識の理解を可能にするのだと言う。しかもこの述語的、別な言い方では表現する行為が人間の認識の根源にあって、それがあから他者と、そして自己自身も意識の共有が可能になる。このように西田(1932)は『無の自覚的限定』などで主張している。西田は後期になると行為の展開を包み込む場の状況を「場所的論理」として表現するようになるが、ここで言う場はクルト・レヴィンの「トポロジー心理学」の援用であることを彼自身も述べている。ただ、レヴィンがどちらかという場とそこで展開されていることを外部者として見ているのに対して、西田はその場で生きて働いている自己活動的な全体として見ようとした(鈴木, 1996)。そこではいわば「行為としてのゲシュタルト」とでも言うべき現象が人間の意識であり、意味世界である。

ヴィゴツキー自身は晩年になって人間精神の根源にあり、またその全体性を把握すべく「人格」という概念や、環境との関わりを通して体験を自分なりの意味理解とする個人レベルの「心的経験」に注目するようになった。これも人間精神と人間意識の根源としての「ゲシュタルト形成」の問題である。しかし、ヴィゴツキーには「人格」概念や「心的経験」論を十分に深める時間は与えられていなかった。

そのように考えると、「無言のコギトは存在し得るか」、というメルロ＝ポンティの問いへの答えを探求するということは、人間の意識とその発達を解き明かすということ、つまりヴィ

ゴツキーの目指した「人間の心理学」に到達するための重要な手がかりになると考えられる。

(2) ヴィゴツキーに欠けている視点：ゲシュタルトとしての身体

メルロ＝ポンティ（1945）は人間が行為として環世界やそこに存在しているものに関わっている時に立ち現れてくる原初的なものとして身体に注目する。身体は世界と関わる人間の行為を支える「媒介」であり、その意味では「身体は<われわれ>と<物>との間の衝立になっている」（邦訳, p.282）と彼は言う。身体を媒介にした行為は意味を立ち上げる。メルロ＝ポンティが死後、残していった「研究ノート」（1964）の中では次のように述べている。「ゲシュタルトを経験するのは誰であろうか。それはゲシュタルトを理念あるいは意味として捉える精神であろうか。そうではない。それは身体なのである。一いかなる意味でか。私の身体は一つのゲシュタルトであり、それがすべてのゲシュタルトのうちとともに現前しているのである。私の身体もゲシュタルトなのである。それもまた、そしてそれこそがすぐれて鈍重な意味作用なのであり、肉なのである」（『見えるものと見えないもの』邦訳, p.294）。そしてこの文章の最後は次のような言葉で結ばれている。「ゲシュタルトを『認識』ないしは『意識』の枠組みのうちに置き直すすべての心理学はゲシュタルトの意味を捉えそこなっている」（同上, p.294）。身体は「一種の反省作用を素描する」（『知覚の現象学・1』邦訳, p.165）のであり、身体は「いくつかの生きた意味の結び目」（同上, p.252）なのである。

このように身体による活動や行為することそのものが「意味」の生成と深く関わっている。だから身体と行為、そして精神との間には境界線を引いて区別することはできなくなる。メルロ＝ポンティが人間精神を考えていく時に身体を重視するのは身体は主観と客観の間にあり、両者をつなぐものだからである。主観対客観、あるいは主体対客観的対象といった二つを分断して考える発想を乗り越える手掛かりとして身体はある。我々にとっては身体そのものを見る対象、触れて感じるができる客観的な対象であると同時に、この身体で見たり、感じたりすることの延長に知覚や触覚という認識があり、その意味では身体という物理的制約を超えてもいる。だから身体というシステムは主観-客観が交叉する「蝶番のまわり」（『見えるものと見えないもの』邦訳, p.294）にあるとも言われる。意識は身体という意識外で行われている出来事に基づいているものだが、同時にこの身体や外部の出来事は意識によってしか認識できないから心（或いは意識や認識）と身体とは分離することは不可能なのである。

(3) 歴史としての身体

ゲシュタルト心理学、そしてメルロ＝ポンティ（1942）が『行動の構造』でゲシュタルトを身体の問題としてとらえようとした時、構造という「秩序」の発想が優位になってしまう。それは同時に「歴史」や「変化」の軽視につながっていく。ゲシュタルト心理学の中で「変化」を「人間発達」の視点からとらえたのがクルト・レヴィンであったが、彼の場合は客観的な行動記述を重視したために、人間意識の問題として身体や行為を十分に考察していない。後期のメルロ＝ポンティは発生としての人間精神の問題、「発生の現象学」に向かっていったが、人間精神の原初としての行為、身体をゲシュタルトとして見ること、そしてそれらを歴史的なものとしてみる「歴史的な身体」については、ヴィゴツキーの研究

の中にはない。だから彼には歴史・文化はあっても、「歴史的身体」はない。

6. まとめにかえて

本論では、主にゲシュタルト心理学へのヴィゴツキーの批判を取り上げながら、現時点でのゲシュタルト心理学の限界と問題点、そして発展の可能性を述べてきた。

限界と問題点としては、コフカが論じたようなレベルでのゲシュタルトは、原始的、本能的なものという色が強いから、その原始性から知性化していく性格をもった人間の心理のすべてを説明するには不十分だということである。発展の可能性としては二つの方向性を挙げた。

一つは、ヴィゴツキーの提示した、ことばや文化という路線との相互連関を捉えることである。それによって、原始的なゲシュタルトとは違った、コフカの言うところの「大人の世界」の構造と成り立ちを原始的なゲシュタルトとの連続性の中で発達的に考えていくことが可能になる。このような考えに基づけば、ヴィゴツキーがコフカのゲシュタルト原理の原始性を批判しつつ重要視していたことがよく理解できる。彼の理論の中では、原始的な性格を持った機能は、劣った機能や捨てられる機能ではなく、発達を基礎づけるものであり、発達の過程で別の機能と合流してともに新しいものを生み出す重要な役割を担うものなのである。

ゲシュタルト原理の発展の可能性のもう一つは、メルロ＝ポンティの「無言のコギト」に代表されるような、ことばを得た後にもなお残る、ことばとの関係だけでは覆いつくすことのできないゲシュタルトの領域の探求である。これはヴィゴツキーの指摘しなかった部分ではあるが、詰まるところ、人間の生を構成する欠くべからざる一側面であり、人間の心理の全容を解明するためには避けて通れないものである。つまり、ゲシュタルト心理学を正しく発展させるという意味でも、ヴィゴツキー理論を正統に継承するという意味でも重要な課題である。

文 献

- ベルグソン, H. 1896 物質と記憶 田島節夫 (訳) 1965 白水社.
 廣松渉 1972 世界の共同主観的存在構造 勁草書房.
 コフカ, K. 1921 *Der grundlagen der psychischen entwicklung*. Verlag von Zickfeldt, Osterwieck am Harz. 縣 卷太郎 (訳) 1935 児童精神発達の原理 東京モナス.
 コフカ, K. 1925 *Der grundlagen der psychischen entwicklung* (2.verbeserte auflage) . Verlag von Zickfeldt. Osterwieck am Harz. R.M. Ogden (trans.) 1928 *The growth of the mind*. Kegan Paul, Trench, Trubner & Co., Ltd.
 レヴィン, K. 1935 パーソナリティの力学説 相良守次 (訳) 1957 岩波書店.
 レヴィン, K. 1936 トポロジー心理学の原理. 外林大作・松村康平 (訳) 1942 生活社.
 レヴィン, K. 1950 社会科学における場の理論. 猪股佐登留 (訳) 1956 誠信書房.
 マルクス, K. 1844 / 1932 経済学・哲学草稿 長谷川宏 (訳) 2010 光文社 (光文社古典新訳文庫) .
 ルリヤ, A. R. 1974 認識の史的発達 森岡修一 (訳) 1976 明治図書.
 マルクス, K.・エンゲルス, F. 1873-75 資本論 (マルクス・コレクション) 今村仁司・三島憲一・鈴木直 (訳) 2005 筑摩書房.

- メルロ＝ポンティ, M. 1942 行動の構造 滝浦静雄・木田元 (訳) 1964 みすず書房.
- メルロ＝ポンティ, M. 1945 知覚の現象学・1 竹内芳郎・小木貞孝 (訳) 1967 みすず書房.
- メルロ＝ポンティ, M. 1964 見えるものと見えないもの 滝浦静雄・木田元 (訳) 1989 みすず書房.
- 西田幾多郎 1911 善の研究 小坂国継・全注釈 講談社 (講談社学術文庫).
- 西田幾多郎 1932 無の自覚的限定 (西田幾多郎全集第5巻) 岩波書店.
- サルトル, J-P. 1940 想像力の問題 平井啓之 (訳) 1979 人文書院.
- 鈴木享 1996 西田幾多郎の世界 (鈴木享著作集第2巻) 三一書房.
- 滝浦静雄 1972 想像の現象学 紀伊國屋書店 (紀伊國屋新書).
- ヴィゴツキー, L. S. 1925/1982 行動の心理学の問題としての意識 柴田義松・藤本卓・森田修一 (訳) 心理学の危機・所収 1987 明治図書.
- ヴィゴツキー, L. S. 1930 心理システムについて 柴田義松・宮坂瑠子 (訳) ヴィゴツキー心理学論集・所収 2008 学文社.
- ヴィゴツキー, L. S. & ルリヤ, A.R. 1930 人間行動の発達過程: 猿・原始人・子ども 大井清吉・渡辺健治 (監訳) 1987 明治図書.
- ヴィゴツキー, L. S. 1930-31 文化的-歴史的精神発達の理論 柴田義松 (監訳) 2005 学文社.
- ヴィゴツキー, L. S. 1933 意識の問題 柴田義松・宮坂瑠子 (訳) ヴィゴツキー心理学論集・所収 2008 学文社.
- ヴィゴツキー, L. S. 1934 Preface to Koffka. *In The collected works of L.S. Vygotsky Vol.3*. In R. van der Veer (trans.) 1997 Plenum Press. 柴田義松・宮坂瑠子 (訳) 2008 ゲシュタルト心理学における発達の問題 ヴィゴツキー心理学論集・所収 学文社.
- ヴィゴツキー, L. S. 1935 知的障害の問題 障害児発達・教育論集・所収 柴田義松・宮坂瑠子 (訳) 2006 新読書社.